

63

ペリー来航後に平野重誠が著した救急書 『軍陣備要救急摘方』（1853）

中村 節子¹⁾，平尾真智子²⁾

¹⁾看護史研究会，²⁾東京慈恵会医科大学医学部看護科

演者らは江戸時代後期の町医者，平野重誠（1790～1867）の医療思想に関心を持ち，これまでに彼の著作『革谿医砭』、『病家須知』、『養生訣』、『玉の印槌』を研究し発表しているが，今回は5作目として『軍陣備要救急摘方』を取り上げる。

本書はペリーが来航した嘉永6（1853）年の11月に著された庶民のための救急法で，自序を入れ全46頁の和綴じ本である。29～40頁には救急法の図が書かれている。大きさは縦20cm，横14.5cmである。自序には，江戸幕末の外夷の侵入，開国など江戸社会が危急存亡のときにあり，国を憂えてすぐに会得できる救急治療の方法と作りやすい薬を選んで書いたとある。

この著作について富士川游は，江戸時代後期・李世の「軍陣医学」の項目で取り上げている（『日本医学史』）。ここには江戸初期の原南陽による『砭草』が最初に紹介され，この『砭草』に次いで著されたのが平野の『軍陣備要救急摘方』であり，その治方は蘭方に参酌する，と記されている。また嘉永6年には菅生茅山が『続砭草』を著していること，嘉永7年には大槻俊齊が洋書の外科書から銃創部を摘録した『銃創瑣言』を，ついで佐藤尚中が『斯篤魯獸児砲疾論』を，鳥村鼎甫が『創疾新説』を著したとしている。蒲原宏は「嘉永6年（1853）6月3日，浦賀へのアメリカ艦隊を率いてのペリー来航による開港の要求，攘夷の論議を沸き立たせ，戦乱の様相が兆し始めていた。世相の動きに敏感な著述として，救急書，特に軍陣携帯用医書が出版された」と述べ，代表的な救急用医書として『砭草』と『救急摘方』の2冊をあげている。そのうち骨関節損傷治療についてみると，平野のものが理解しやすく実用的であると述べている（『日本外科前史』）。

本書の内容は「火傷の手当て」「銃弾の摘出法」「焼夷弾による火傷の手当て」「毒煙に害されたものの治療」「切り傷の手当て」「止血薬」「切傷の心得」「捻挫の手当て」「打ち身で瀕死になったものの救助法」「骨折時の手当て」「熱中症で悶絶するものの手当て」「凍死しそうなものを救う心得」「溺れたものを蘇生する心得」「気を養い敵を圧倒する力を生む方法」「薬方八首」など15項目が記されている。これらのうち「切傷の心得」「止血薬」「捻挫の手当て」「骨折時の手当て」などは『病家須知』（1832）の第5巻にすでに著述しており，「武家などにてよく習得れば，軍中の備にもなること必然なり」と書かれていることから，この時点からすでに世相の混乱を予測していたとも思われる。内容のうち火傷には「火傷にて皮膚も糜爛までにいたらぬものは速にその傷処に水を多く灌ぎかければ，痛忽寛崧ものなれども，やや重きものにて，その傷とこころ，もし手足ならば，すみやかに灯油の中にしばらく差しこみおくべし。惣身ならば，酒樽の酒を半分に分けて，樽の中へ身を投入し，良久く漬居べし。もし糜爛甚くして，痛堪がたくは鶏蛋油を多く塗て裂木綿にて縛おくべし」とあり，切傷の手当てでは「金創はすべて速に清水にて洗ふべし。灰汁もよし。石灰を水にかきたてたるを絹にて濾たるも用ふべし。往古は焼酎をのみ用いたけれど，焼酎は痛強くして堪えがたければ，代わりに石灰汁を以てし，遂には水を用いたりしなり。金創はすべて部位と浅深によりて治不治を決めることながら，いづれにもはやく血の多く出ぬようにすることが肝要なり」とあり，身近なものをを用い庶民にも理解できるように平易に書いている。また絵図を多用し目でみてわかるように工夫している。

救急法は病気や災害から自己を守り，他者を救助し専門家に引き継ぐまでの応急処置である。本書はペリー来航という世相から戦乱を予想した医療者が，庶民の生命を救うための救急法の普及のために時宜を逃さず著したものと考えられる。